



流れ星

福島 鏡

祈ることで願いが叶うならば、祈りを捧げ続けたい。

ふと見上げた静かな秋の夜空に、今夜も星はきらめいている。二十五年前に結婚したゆかりの夫は、十年前に癌で亡くなった。

あなたさえいてくれら何もほしくなかったのに……、私はあまりにも幸せすぎた。世の中には結婚しても愛が通わない夫婦もいる。妻をだます夫もいる。夫を欺く妻もいるのに。どうして、あなたは死ななければならなかったの……。どうして幸せだった私たちは、あなたのいない不幸を死ぬまで続けなければならないの……。

結婚して二年目に生まれた雄太は、もう二十四才になります。不幸を知らない十四年間はあっという間に過ぎ、雄太を育てる私と雄太の八年間は戦いの日々でした。今、雄太はあなたが私と結婚した年になりました。

あなたのいない日々は苦しみでした。あなたのいない夜は悲しみでした。雄太は、あなたに似て好青年に育ちました。やがて、雄太もあなたと私のように妻と呼ぶ女性と一緒にになり、新しい人生を歩き始めることでしょう。

それは私の人生で最良の日でもありますが、雄太との日常がない日々は、又新しい苦しみの始まりです。どうやって人は誠実に生きていくのでしょうか。どうやって私は愛を信じて生きてゆけばいいのでしょうか。教えてください、あなた。

都会から遠く離れた地方都市の郊外にある家を包む暗闇は、星をはっきりと夜空に浮かべていた。ゆかりが見上げる南の空に一筋の光の流れがずっと走って消えた。

「あなた。帰ってきて……」

祈るように呟いた言葉が口をついて出たのは流れ星が消えた後だった。

ゆかりは少し肌寒く感じる冷たい空気の中で、研ぎ澄まされた精神が天に昇っていくような鮮明さを覚えつつ、一人南の空を見ながら散策する。

又、一筋の光がずっと走って南の空に消えた。

「あなた。帰ってきて……」

今度も、ゆかりの心の呟きは遅かった。

ゆかりは、流れ星を求めてゆっくり歩いている。闇の深さが増した真夜中に、星は、星座は益々その輝きを強く放っている。ゆかりは一瞬星の輝きが鈍くて青く黒い夜空の部分に目をやった。

間もなく、小さい光の点が灯った。

「今だ」

ゆかりは

「あなた。帰ってきて、愛しています」

小さな光の流れに、ゆかりの言葉が瞬時に乗って共に消えていった。思わぬ奇跡に近い出来事に、ゆかりの胸は満たされた。子供が生まれ、だれかが死んでいく日々の世界で、死んだ人が帰ってくるはずもないが、それでも流れ星に自分の願いをかけられたことが幸せだった。

久し振りに、ゆかりは幸せを胸に抱いて布団の中に入った。

「ゆかり。ゆかり。聞こえるか。タケシだよ」

どこかで、夫のタケシの声がする。

「どこにいるの。あなた・・・」

「こっちだ。こっちだ」

ゆかりが後ろを振り向くと、黄色い花が咲いている高原の中空を手を振りながら、満面に笑みを浮かべたタケシが歩いてくる。

「ゆかり。俺もゆかりを愛してる。ずっと愛してる。死んでも愛している」

「どうして、あなたは死んでしまったの」

「癌と戦ったけど、癌には勝てなかったのだ。ごめん。体は癌にやられてなくなってしまったけど、俺の心や魂は死んではいけないよ。だから昔のように体で姿を現すことはできないけど、俺はいつもこんな風に心と魂でゆかりと雄太の側にいるんだよ。だけどゆかりや雄太が幸せでなかったら、俺も悲しい。良い人がいたらゆかりも再婚してくれ。その方が俺もうれしいよ」

「う、う、私は結婚しないわ。私は、あなたと一緒にいたい。だけど、あなたはこの世にはいない。だから・・・」

「だからだよ。無理に再婚する必要はないさ。だけど、いい人がいたら一緒になってくれ。それが生きてる人間の幸せというものだ」

「一輪の花を二人で愛でて、一つのアイスクリームを二人で舐めて、怒られても笑い、笑いながら怒る。下手な歌を笑いに変え、真面目なときには二人で真剣になれる人なんて、あなたしかいないわよ」

「おい、おい、それは、俺を褒めているのか。それとも馬鹿ってことか」

「そうね。私には馬鹿だけど、世間様にはお利口さんというところかな・・・」

「わかった。ゆかり。寂しい顔や悲しい顔をしないでくれ。それを見るのが一番つらい。雄太も立派になった。有り難う。全部、ゆかりのお蔭だ。俺はいつもゆかりと雄太の側にいる。俺に会いたかったら晴れた日の夜空を見なさい。そして、又流れ星に呼びかけてくれ。俺は必ず夢の中で会いにゆく。愛してる」

「あなた。あなた。タケシ・・・」

ゆかりが夢から覚めると、ガラス窓に掛かった白いカーテンがふわりと揺れた。